

# いじろのとも

第三卷

九月号

## 二宮尊徳の教え

二宮尊徳の訓言は

勤勉

節約

分度

推譲

という

勤勉、節約は

誰でも知っている

分度とは

天から頂いたものを

人間がどう使うかということ

天の恵みを蓄えて

経済的に生産と消費の

バランスを保つということ

推譲とは

譲ること

自らを譲って（自譲）

人のお世話にならず

他者に譲って（他譲）

人と争わないということ

現代にも

役立つことではなからうか

## ひとりで悩みたくない人は

八、人が悪いと思う前に自分を反省してみることに。

神ならぬ人間は、この世に存在して、相対的で、有限で、時間的です。神や仏が、絶対で、無限で、永遠なものと対照を成しています。ですから、悲しいかな神や仏の分からない、あるいは信じない人にとって、この世だけが頼りになる世界であります。そうしますと、人との相対的な比較の中にだけ、自分の存在意義と安心を見出します。

あの人よりも、血統がよい、先祖がよい、住んでいるところがよい、家が大きい、よいものを食べている、お金をたくさん持っている、財産がある、山が多い、田地が多い、地位が高い、出世をしている、高い教育を受けている、頭がよくてよく勉強ができた、容貌がよい、スポーツがよくできる、表彰されたことがある、皆から尊敬されている、皆から好かれている、皆から頼りにされている、よい子に恵まれていて、よい連れ合いにめぐまれている、健康で長生きしている、年金を沢山もらっている、沢山の業績をあげている、などなど数え上げれば切りがないほどあると思うのです。どれも人との相対的な比較の中に安心を見出しています。

こうした世俗的な基準で自分の安心を高めれば高めるほど、人は残念ながら知らないうちに自分が偉いと傲慢になって行きます。ますますエゴイスティックになって行きます。自分に得になる関係だけが大切になっていきます。自分に利益が得られる人だけが善い人であり、自分と利害が対立したり、自分のプライドが保てない人は悪い人になっていきます。自分の色めがねを通してだけ、人の善悪を判断してしまいます。

もちろん、これは個人的な関係に限りません。イラクを代表してフセイン氏のことには、まさしくこの適例だと思えます。また、先日、甲子園の高校野球で高橋生なのに「有名な強打者」を全打席敬遠したといつて、スタンドが騒ぎ、メガホンを球場に投げ込みました。ここまででは、その生徒のファンがすることであり得ることだと思のですが、そのあとの高野連の対応が全く理解の出来ないものでした。まさしく自己に執らわれているとしか表現できないもので、今日本人がおかしくなっていると、直観的に思いました。フセイン氏のように自己に閉じて情動的になっているとしか思えないのです。これほど「英雄」を欲しがっているようでは、日本も今に侵略へと踏み出して行くのかもしれない。その危険性を感じてしまいました。

実は、野球のルールに反しない敬遠が卑怯なら、バンドも盗塁も卑怯です。バンドなんかしないで、堂々と打ち勝つべきです。スクイズも卑怯千万です。また、盗塁も投手のモーションを「盗んで」走らず、打って走るべきです。そして、あの場面で「本当に」卑怯で恥ずかしかったのは、高校生としてメガホンを球場に投げ込んだことです。それこそが、絶好の教育場面だったのです。

人間は自分に執られると、どんな場合でも人が悪いと思ってしまう。この野球の例のように中立的立場を維持しなければならぬ高野連の会長が、情動的になつて「英雄的な強打者」に執られ、あの場面で最も卑怯であつた、メガホンを投げ込んだ生徒には一切おとがめなしで、敬遠した方を責めるような発表をしたことは、この題目の例にびつたりだと言えます。フセイン氏とあまり変わりません。「強打者」に執られて、敬遠した方が悪いと思う前に、もっと冷静で、理性的で、客観的になつて、なぜ敬遠したのか、敬遠とはどういうことなのか、メガホンを投げ込むことはどういうことなのかを考え、試みるべきだと思ひます。

この例のように人間は何か執られますと、理性が麻痺して他のことは見えなくなるものなのです。それは人間が相対的である悲しさから来ています。お互いが「あ

いたいていて」いるからなのです。自分を否定する者が他者だと思えてしまうのです。自分の存在を脅かすものが他者なのです。自分を主張しなければ自分が押しつぶされてしまう存在が他者なのです。ですから、先程述べましたような、何かの側面で他者と相対的に比較して、自分の安心感を得ています。

こうした人間の基本的な精神的存在形式が、自分がいづも正しいと思わせるわけです。自分では気付かないうちにそうなつてしまふのです。ですから、人が悪いと思うときは、まず自分が執らわれていなかどうか、よく反省してみると、自分が大切なのです。まず、自分の勝手なエゴが受け入れられないだけなのではないかと反省してみることです。多くは自分の執われ、自分のエゴを投射して、人を非難していることが圧倒的に多いのです。私が体験したそうした例を書き上げて行けば、何百枚の原稿用紙があつても足りないほどです。

でも、人間は孔子が「仁」という言葉で表現してきますように、自分を抑えて他者のために尽くすことができます。それもやはり人間が「あいたいていて」いるもう一つの証なのです。ひとで悩みたくない人は、人が悪いと思える時、まず、自分が悪いからではないか、と反省してみたいと思ふのです。

## 自作詩短歌等選

### 台風襲来

台風が  
今年もやって来た

まだ八月初旬なのに  
やって来た

いろいろ被害を  
もたらしていった

なすにトウモロコシに大  
豆は

すべてひっくり返ってし  
まった

栗の木は何本も折れ実は  
落ちた  
昨年植えた果樹はぐらぐ  
らになっている

道路を折れた桜が塞ぎ  
部落の皆でかたづけに行  
った

山の暮らしは厳しい  
少しの災害でも被害は大  
きい

でもこれも自然の恵み  
どこまでも従って行かな  
ければ

### 残暑の鶏頭

鶏頭や  
真っ赤に咲きし  
残暑かな

### 生と死

異国にて  
ヘリコプターの  
事故に遭い  
生きて帰る人  
死して帰る人

人間の  
いのちはかなし  
生と死は  
紙の表と  
裏のごとしぞ

## 障害児の教育

人間の教育には  
愛情と  
自由と  
統制が  
いる

なのに  
障害児教育では  
愛情もなく  
自由もなく  
統制のみが  
ある

こうして

人に好かれ  
社会に適応する  
障害児が  
作り出されて  
行く

馬鹿な！

## 田舎の人間関係

濃密な  
人間関係  
プラスにも  
マイナスにもなる  
田舎づきあい

## 人権・平等・差別

人権と  
叫ぶだけでは  
たかだかに  
投票権の  
平等に終わる

その理由  
これまで誰も  
言わざることが  
人の本質  
権になく  
人の本質  
心にぞある

人権は

たてまえの世界のこと  
約束の世界のこと  
形式の世界のこと  
人の差別は  
ほんねの世界のこと  
心の世界のこと  
実質の世界のこと

## 反省

自らの  
自我が傷つく  
人さまの  
言葉大事に  
明るく反省

## 自作随筆選

### 生きる道しるべ

私たちは、毎日日々、生きています。ああしよう、こうしよう、あれもしよう、これもしよう、といろいろの念（おも）いを持ち、いろいろと計画しながら毎日、暮らしています。

では、何のために毎日、生きて暮らしているのでしょうか。そのことを皆さんは、考えてみられたことがありでしょうか。

これには、極めて多くの答えがありうると思います。もっとも消極的なものは、何も生きる目的はないが、ただ死ぬのが怖いから、毎日、働きもせず、年金や蓄えて御飯を食べ、テレビや新聞を読み、ぶらぶらして生きながらえている。そして、ただ楽しみは、テレビやビデオですきな映像を見、おいしい食事をしたり、酒を飲んだりして舌を潤すことぐらいしかない、といったものでしょう。こういう人は、人と話をするにはあるでしょうが、それは全て自分の気晴らしのためであって、他者のために何かをしてあげようという気持ちは殆ど持ちません。ですから、せいぜい出来ることは、人に世話をかけ

たり、自分が不機嫌になつて周囲の人を不愉快にするにとぐらいのもので、はた迷惑もいところす。

これほど極端ではなくても、毎日を殆ど惰性で生きている人もいると思います。将来にも、たいした希望がない。かといって今の生活も、経済的にはそれほど苦勞はなくても、何か精神的に満たされないものがある。職場の悩みや家庭の悩みで心がいつも圧迫されていたり、これといった特定の悩みはないのに、漠然とした不安のよなものがある。でも、それを自分で解決ができないで、毎日を悶々と暮らしている。何のために生きているのかよく分からない。ただ自分が死んだら、何人かの人は迷惑を受けるに違いない。もし子どもがいれば、路頭に迷うだろう。親がいれば、ひどく悲しむだろう。始めのうち、何とかこんな状態を抜きたいと思つたこともあるが、今はもうその気力もなく、ただ惰性で生きている。そうした人もいると思います。

また、惰性で生きているだけなのですが、ただ目先の目標だけは持つている。そういう人も多くいると思います。例えば、家とか土地とか車とかといった、何か物を買いたいとか財産を得たいと思つて（自分のためであるうと子孫のためであろうと）、一生懸命働いてお金を貯めようとしているとか、会社とか役所などの職場で、出

世したいと思おうと思うまいと、割り当てられた役割を懸命に果たそうとしているとか（勿論これもお金を貯めることにつながっていることかもしれませんが）、退職している人では、地域の人や身内とか家族の人に気に入られることだけを求めて気をつかっているとか、自分なりに趣味を追求して生き甲斐を見出そうとしているとか、中には自分の名前や財産が残ることばかりにあくせくして、多くの人の笑い物になったり、周囲に迷惑ばかりかけている人とか、その他惰性で生きている人は多くいます。でも、こうして何か目標をもって生きている点ではよいのですが、その目標が適切でないために、ただ惰性で生きるだけに終わっているように思われるのです。

勿論、財産を得ることそれ自体は悪いことではありませんし、職場で一生懸命働くことも、趣味を大切にすることも、人の気に入られることも、みんな悪いことではありません。ただ、そのことだけを人生の目的にして、それに執われるときに間違いが起こるのです。

実は、人生にはもっと大切な目的があるのです。それは、自分の心の中に絶対な幸せを作り出すことなのです。外的な何事によっても崩れ去らない、自分だけの心の中にある絶対な幸せなのです。財産はなくても、誰からも認められなくても、誰からも愛されなくても、地位や名

誉はなくても、健康や長寿がなくても、今日、今生きていることそのことだけで、自分の身体の中から喜びが湧き出してくる。それを誰であろうが邪魔することは出来ない。自分の心の中にこうした幸せ感が溢れ出て来るようになることこそが、真の人生の目的なのです。

こうした幸福感を得る時、財産を得たりそれを減らさないで子孫に続かせたりすることも、出世をして名誉や権力を得、そのことを人々の記憶の中に残すことも、人の気に入られることも、趣味を追求することにも、そんなにこだわらなくてもよくなってくるのです。そうしたものは得られれば得られたでよし、得られなければ得られないで、それもよし、といった気持ちを持つことが出来るようになるのです。

そして、それと同時に自分の幸せな気持ちを、いま幸せではない人たちに分かち与えたいという気持ちが湧いてくるのです。人の幸せの為に何かをしてあげようという気持ちが湧き出て来るのです。

このように、私たちが毎日生きていく「道しるべ」として、ただ世俗な目標だけではなくその上に、一方では「自分」の心の中に絶対な幸せを作り出すと同時に、他方では「他者」の幸せのために何かをさせて頂くという、二つの最高の目的が、自他それぞれの側に同時に存在す

るのです。

でもこの目的は、情性的に日常性に流されて生きる中で、ただ手をこまねいては実現することは出来ません。ひたすら人生の過程の中で自分を見つめることが大切です。そしてそれによって、自分の存在の根源的な構造や意味に気付くことが大切です。それと同時に、自分を制御するための修行がいります。

不幸なことに、自分が何でも自由に出来ると思えば思う程、人間は傲慢になります。自分で自由に生きて行けるし、生きていると思えます。他者に生かされているとは決して思えるものではありません。まして自分を超えたもの、絶対なものなど仮定する必要はないと思ってしまうのです。そんな架空のものを考えるのは弱い者のすることだと思ってしまうのです。そして、そう考えることが情性に陥った生き方であり、世俗の価値だけを追求する生き方であり、これこそがエゴイズムの極致であることに気付かないのです。

これまで述べたような世俗な価値を追求することを、全く否定するわけではありません。そうした価値を追求しようとする意欲があるからこそ、さらに高い価値の実現へと向かうことが出来るのです。しかし、そうした世俗な価値の追求は、自己を見つめ、自己の限界に気付く

ための手段であつて、もしその追求だけに閉じたとき、執われが起こり、決して自分の心の中に絶対な幸せを築くことは出来なくなってしまうのです。

ですから、何か自分の限界のあることを徹底的に気にして、それを克服するように努力して行こうではありませんか。その限界は自分の人生から目を離さないで、じつと見つめていれば必ず見つかるものです。極端に言えば、自分は死にたくないのに、いつでも、誰にでも、そこに死が迫っているということなのです。この限界を逃れることは、誰にも絶対に出来ない人生の厳然たる事実なのです。

しかし、死の厳然たる現実を知れば知るほど、人間はその恐ろしさの故に、虚無的になったり、厭世（えんせい）的になったりしてしまいます。私は子どもの頃、間もなく死ぬのではないかと思うと、怖くてしかたありませんでした。今もそのことを忘れることは出来ませんが、でも、今ではそんなことはなくなりました。死の不安は全くなくなつて来ています。

それは、修行としては一つにはヨーガをずっと続けて来ていること、もう一つにはヨーガと同じ系列に属する真言密教の修法を実修していること、の二つのお蔭なのです。そして、知的な面では大阪経済大学で鈴木亨先生

(現大阪経済大学理事長)の響存哲学に出会ったこと、そして感情的な面では障害児とその親に出会ったことです。それによって自分の生きていく意味に気付くことが出来たのです。

この世の人生は、自分を生かす道と他者を生かす道の統合の中に営まれています。自分が生きることばかりを考えていますと、必ず自分が滅んでいきます。他者も自分と同じ感情を持っていくことを忘れていては、やがてそういう人によって自分も滅ぼされていかざるを得ません。自分への執われを捨てる時、自分の命も他者の命も同じ重さをもって測ることができるようになります。

ですから、一方では自分の世俗な目標を追求しながらひたすら自己を見つめて、絶対な幸福を自分の心の中に作り出すこと(解脱すること)と、他方では他者の「心を感じる心」を養い、社会の秩序を尊重して、皆の幸せの実現を考えていくことが大切になるのです。これが、私たちが生きていく道しるべなのです。

## 釈尊のことば(五)

解説

### 第三章 はげみ

(二一) つとめ励むものは不死の境地である。怠りなまけるものは死の境涯である。つとめ励む人々は死ぬことが無い。怠りなまける人々は、死者のごとくである。

(二二) このことをはつきりと知って、つとめはげみを能(よ)く知る人々は、つとめはげみを喜び、聖者たちの境地をたのしむ。

まず、(二一)ですが、「つとめ励む者」と「怠りなまける者」とが対になっています。前者は不死の境地であり、死ぬことがないが、後者は死の境涯であり、死者のごとくである、というわけです。

では何故、つとめ励めば、不死の境地になり、怠りな

まけると死者の境涯であり、死者と同じことなのでしょうか。

これに答えるためには、人間は何のために生きているのか、あるいは人間の本質はどこにあるのかを考えてみなければなりません。

もう何度も挙げたかも知れませんが、「人多き 人中にも 人ぞなき 人になれ人 人になせ人」という歌があります。私も、「人がいない」という題の次のような詩を作ったことがあります（今年の一月号）。

「人がいない／人／一人としていない／人がいない／求人したくても／人がいない／人がいない／人がいない／人がいない／真に／人になつた／人がいない」

これらのうたのように、人が人間として生まれて来たからには、人は人間らしい人間にならなければなりません。人間以外の存在者である動物や植物と同じでは、人が人間に生まれた意味が失われると思うからです。

では、人間らしい人間とは、どんな人間なのでしょう。すでにこれも何回も述べて来ましたが、「自己」の側について言えば、それは自分の情動や衝動を制御して、他者の心を大切にすること、自分の生き甲斐を追求して解脱に達する、つまり絶対自己に至ることです。もっと分かりやすい言葉でいえば「絶対な幸せ」を自分の心

の中に作り出すことです。一方、「他己」の側について言えば、それは他者の心を大切にすることの極致として絶対他者（神・仏）を体感し、実感することです。もちろんこの二つは紙の裏と表のようなもので、これらが総合されたとき同時に実現されるものなのです。

しかし、人間は悲しいかな、誰でもが必ずこうした解脱に達することが出来るかと言えば、そうではないように思われます。それはその人の精進の程度と持つて生まれた業（素質や生まれついた環境）に依存していると思うからです。

でも、たとえ解脱できなくても、解脱したと同じように行くことは可能なのです。解脱を信じて、努力することとは可能なのです。そしてそう努力すること以外に、人間の生きる道は存在しないのです。解脱するかしないかは、仏さまのはからいなのです。それは、私たち人間のはからいを超えていることなのです。人間に出来ることは、それを目指して「ただひたすら」に精進することだけなのです。その時、解脱しなくても、解脱者と同じように人の道にはずれないで、人間らしい人間として生きていくことが出来るのです。

解脱者と解脱者でない人とを分けるものは、人間の内に絶対な幸せをいつも感じ、仏さまの世界を絶対的に

信じているかどうかにあると思いますが、そうではなくても解脱者といっしょにいれば、解脱者の幸せが周囲の人にも伝染して、解脱者と同じような幸せな気持ちになれるものなのです。ただ、その時大切なことは、解脱者が信じる仏の世界とその解脱者とをひたすら信じることなのです。それに少しの疑いも持つてはなりません。その人がいう事やする事を絶対の真理として信じなければなりません。そう信じて、ひたすら精進するとき、人は解脱者と同じ心境を味わうことが出来るのです。

現代人の大多数の人のように自らの力を信じ、自らに閉じて傲慢になり、自らの執われを映して人を判断する世界には、決して解脱も真の幸せも訪れることはありません。また、そういう世界では、ひたすら「つとめ励むこと」も難しいのです。自分の利害や情動や欲望に執られて、「怠りなまけること」しか出来ないのです。現代人の大多数はそうなっていると思います。

私は、そうした人生をかつて犬猫人生と言いましたが、そのような自らに執られて怠りなまける人生を幾ら長く送ってみても、一日でも真につとめ励む充実した人生を送った人よりも、はるかに、はるかに哀れなものなのです。そんな人生なら、いくら長く生きても人間として生きていく意味はありません。ですから、この詩にありま

すように、怠りなまける人は死んでいるのも同じなのです。そうした人はせいぜい人に迷惑をかけるのが落ちです。生きながらえてみても、本人の墮落した自己満足以外にたいして意味はありません。

さて、最後にこの詩の中の「不死の境地」と「死ぬことがない」という言葉について解説しておきます。私たち人間が、この世を超えた、この世をこの世たらしめている絶対他者を実感するとき、自分への執われを捨てて、完全にその絶対他者に自分の人生をまかせることが出来るようになります。そうなりますと、その人は絶対者のいのちをそのままに生きているに過ぎません。死に果てることのない絶対で無限で永遠な命を、その絶対者に替わって生きているに過ぎないのです。そうした人にとって死はたいして意味はないのです。不死である絶対者そのものであると言ってもよいのです。そうした境地を不死の境地と言い、死ぬことがないと言うのです。

勿論、こうした境地を味わうためには、解脱者つまり「聖者」の下でひたすらつとめ励むことが必要です。その人の教えのままに、自分への執われを捨てひたすらつとめ励むとき、その人と同様にそのつとめ励むことの喜びとその境地とを味わうことが出来るようになるのです。どうか毎日、ヨーガ、読経などをお続け下さい。

後記

一、先月の八日は、わが心光寺の縁日でしたが、丁度台風が襲来し、お堂の前の雨戸も閉めて、じっと行き過ぎるのを待ちました。もちろん、どなたもお参りはありませんでした。後で聞きますと、お参りのため家を出られた方もあつたそうですが、途中で止めて引き返されたそうです。翌日、畑を見回りますと、栗の木は去年全国に被害を及ぼした十九号台風と変わらないほど、方々で折れ、実が落ちていました。また、とうもろこし、大豆、なす、こいも、オクラなどが、殆どなぎ倒されました。なんとか起きるものは起こして土を盛りました。でも、なすはそれ以来殆どなくなりました。大豆も被害甚大です。

二、山の自然の厳しさを改めて思い知らされました。また、百姓の不安定さも感じました。若者が田舎で百姓をしたがらない理由の一つを見たような気がしました。

三、二十二日と二十三日に、お四国まいりと精神薄弱者更生施設の訪問に出掛けました。

四、お四国の二十一番札所太龍寺にお参りしようと、昔の道を車で行きましたが、途中から通行止めで行けませんでした。仕方無く引き返しましたが、後で地元の人に聞きますと、ロープウェイが出来たためそうしたのだら

うということでした。ロープウェイの収益の三割がお寺に支払われるそうです。驚きました。観光仏教とでも言うのでしょうか。葬式仏教に観光仏教ですかねえ。

五、阿南市にある精神薄弱者更生施設「西室苑」を見学させて頂きました。真言宗の寺院、善昌寺に併設されていて、その住職さんが経営されている施設です。創設からの苦労話しやこの心光寺のことなどいろいろ話しはずみ、四時間ぐらいおじゃましていました。そこは、男女四十人の人たちが暮らしています。訪問したとき、働きに出ている数人を除き、皆で内職の造花を組み立てていました。皆の笑顔に心がなごみました。

月刊 こころのとも 第三卷 九月号 (通巻 三十三号)	平成四年九月八日(縁日は、毎月 〒7779 53 八日十時より) 徳島県三好郡山城町国政八三四 ひびきのさと(清心者寺院)心光寺 (沙門)中塚 善成 <small>じょうせい</small>
心光寺 口座番号 徳島9 53708	本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 清心者寺院